

## 「GSJ 筑波移転」第2回

# 地質調査所資料室(図書・資料部門)の移転

菅原義明<sup>1)2)</sup>・本荘時江<sup>2)</sup>・曾屋真紀子<sup>2)</sup>



**本荘時江**

1957年入所, 1998年退職.  
移転当時 地質調査所資料室  
資料整理係長.



**曾屋真紀子**

1962年入所, 2004年退職.  
移転当時 地質調査所資料室  
資料収集係長.



**菅原義明**

1976年入所, 2017年退職.  
移転当時 地質調査所資料室  
係員.

.....

## 1. まえがき

筑波移転から40年近くが経過し、経験者が少なくなりました。著者たちも老齢になり、記憶が薄れてきています。編集委員から今回の企画の原稿依頼があった時は、戸惑いもありましたが、幸いにも室員が一日替わりで「その日その日」に起こった出来事を毎日欠かさず綴り続けた日誌メモ(1961～2004)・若干の資料類がありました。また頭の奥深くに埋もれていた記憶を3人で掘り起こしながら記載しています。当時の資料系の姿と筑波移転後の変遷を記しました。

## 2. 筑波移転以前の資料室

地質調査所資料室図書係は当時、本所のあった川崎市高津区久本、通称「溝の口」にありました。近くのドブ川より道路の方が低くて大雨の時には水が溢れて、みんなは「ドブの口」と呼んでいました。また、東京都新宿区河田町にあった東京分室は、前身が東京女子医大の寮の建物であり、そこにも小さな図書室がありました。周りには東京女子医大や旧フジテレビや炭労会館がありました。

当時の資料室の組織は出版、製図、図書と事務を担う

調整で構成されていました(資料室, 1979)。

1976年まで図書係には、資料第一係と資料第二係がありました。1977年に資料情報係を新設。それを機に資料第一係を資料収集係に、資料第二係を資料整理係に改め、三係7名体制となりました(本荘, 1982)。

### 2.1 資料収集係

資料収集係は、日本における唯一の地球科学に関する国立研究機関の資料室という自覚に立って、国内外の地球科学に関する文献情報の網羅収集をめざしていました。研究者の研究成果である月報・報告書類・図幅類との文献交換により、定期的な収集機関網を拡げ、世界122カ国789機関と文献交換を行っていました。国内では地球科学関連機関だけでなく、地球科学論文の直接生産者である研究者個人にも働きかけ、さらに地方自治体等も含め783機関と行っていました。

外国とは、国立国会図書館経由と直送の二方法で実施していました。国立国会図書館経由で行っていた文献交換では、相手国からの寄贈資料は国立国会図書館経由で送られて来ていました。発送費用の削減にも役立っていました。

移転前は所の正式交換数は109カ国470機関でしたが、並行して海洋地質部・国際協力室等研究部独自での交換先

1) 産総研イノベーション推進本部知的財産・標準化推進部

2) 地質調査所(現産総研地質調査総合センター)元所員

キーワード: 筑波移転, 地質調査所資料室, 図書, 文献情報

機関へも資料室経由で発送していました。移転後は資料室交換先と一体化され、世界122カ国789機関となりました。

## 2.2 資料整理係

資料整理係は、受け入れた資料類を書庫に配架し、閲覧・貸出の利用に供しました。当時、書庫は狭くて建物の2階2か所・3階1か所・地下室1か所と東京分室1か所の5か所に分かれていました(第1図, 第2図)。メインの2階書庫は固定書庫だったので、利用は不便ではなかったのですが、天井まで棚が設置されていて、梯子を使わないと利用できませんでした(第3図)。所蔵資料は、図書や雑誌類はもちろんのこと、世界各国の文献や地質図、国内では地方自治体の出版物や個人別刷りなどが多数ありました。利用の少ないロシア語文献や未整理の大量の地形図類や未整理資料の多くは地下室に所蔵していましたが、換気設備が不十分でカビやホコリに悩まされ、筑波移転時に苦労することになりました。



第1図 溝の口庁舎2階の資料室入り口



第2図 溝の口庁舎2階の資料室カウンター



第3図 溝の口庁舎2階書庫

## 2.3 資料情報係

資料情報係は、1977年に新設され、地質部で少しずつ行われていた「地質文献目録(年刊)」の採録を、研究部から協力者を得て本格的に開始しました。

また、当時アメリカではすでにAGI(American Geosciences Institute)で地質文献データベース(GeoRef)が作成されており、コンピューターでの検索が始まっていました。そこで何とかして、日本でも利用できないか検討を始めました。まだ時期尚早、との声もありましたが、試験的に開始し、希望者がシソーラス(語句を意味によって分類・配列したもの。分類語彙表。)を使用して、紙の申し込み用紙に手書きで検索式を書いて申し込み、それを大型計算機でバッチ処理を行い、検索結果をプリンターで紙に出力して希望者に返すという仕方で行っていました。折りたたまれた用紙の厚さは5cmにも10cmにも及ぶという膨大なものでした。まだネットワーク環境がなかった時代に画期的でありました(本荘, 1988)。

## 3. 筑波移転作業

### 3.1 移転資料見積もり

筑波移転で一番大きな問題は、筑波の新しい建物の資料系のスペースがどの位必要かということでした。図書や雑誌類は想像がつきますが地質図類や雑資料類の量は、日々受入れ資料の数を記録していましたが、それを基におよそ10万件と見積もり、更に将来の増加分も含めて算出し、筑波の地図棚と書庫に割り当てる計画を作成し、現在の配置になりました。

### 3.2 書架の変更対応

書庫は増加分も考え、従来の固定書架ではなく収納量が

多いスタックランナーに決めました。ただし、固定書架に比べて同時に多くの方が利用するのが困難なため、移転後、図書・資料類の配架を明確にしました。詳細な配架目録を書架ごとに作成して短時間に目的の資料に行きつけるように工夫しました。

### 3.3 移転準備

移転が決定してから、まず化学雑巾を大量に購入し、地下室のカビやホコリにまみれた資料類を来る日も来る日もきれいにしていきました。その後、資料類の散逸を防ぐため、主要雑誌の製本を大量に大至急行いました。例年の3倍の量を処理しました。薄い資料などは簡易製本機で背側だけ糊づけをして4～5cmの厚さにまとめ、散逸を防ぎました。これで箱詰め作業はかなり楽になりました(第4図)。

### 3.4 移転作業

受け入れ先の書架がスタックランナーで、固定書架の両側1か所ずつしか開かないため、配架作業を簡単に早く間違いなくするために、箱には書架番号を細かく指定し、棚ごとに左からイ、ロ、ハと指定しました。A、B、Cと指定すると納入業者の年配の作業員の方がわかりづらいと



第4図 溝の口2階書庫での移転準備



第5図 つくば中央第七事業所の書庫。2018年6月撮影。

いうことでこの方法にしました。間違いが少なくスムーズに、全資料類が書庫に収まりほっとしました(第5図)。

### 3.5 地図類の対応

溝の口時代に地質図類は丸めたり、折られたりして配架されていましたが、筑波の新しい書庫には、地図棚が出来、外国の地質図類を拵げて配架し見やすくなりました。未整理だった地形図は移転後、外注で整理がなされ、一目瞭然となり利用しやすくなりました。

### 3.6 移転時の体制

職員の転居先は、筑波の公務員宿舎に入居する人と、常磐線沿線に居を構える人に分かれました。先発隊は7月ごろには筑波に住み、受け入れ準備にかりました。それから順次、時期をずらしながら図書の移転作業をしました。最後に転居した職員は本荘で、すべて荷物を送りだし、確認をして1979年10月24日に筑波へ転居してきました。図書室の移転と自分たちの転居が重なり大変でした。筑波では生活環境もまだ整わず、移転直後の台風の大雨で停電となり、自宅へ帰る方法もわからず途方に暮れたことを思い出しました。

## 4. 移転後の資料整理作業

筑波ではスタックランナーの導入により、書庫収納業務を軸に、新たな業務体制を構築し、業務の開始準備をしました。移転後の資料室の公開・開館を11月30日に行うことが決まり、11月27日に「資料室の利用の手引き」が出来上がり、職員全員に配布しました。11月28日に行われた第1回の説明会は参加者96人、11月29日に行われた第2回の説明会は参加者50人でした。移転後は、

十分なスペースが確保できたことと、世の中が情報化・機械化社会になりつつあった影響もあって、それまでに精力的に収集した資料類を明確化して情報提供をすることにもつばら重点を置いたと、今振り返ると思います。

特に、溝の口時代はスペースの関係で所在・配置が明瞭でなかった地質図の存在を、広く知らせることが可能となりました。1982年の地質調査所100周年記念事業の際には研究者の協力を得て、「地質図の世界」として一般に公開する機会があり、世界の主要な地質図を一堂に展示・公開をして好評を得ました。日頃は書庫の地図室に置かれ、なかなか日の目を見る機会が少ない地質図ですが、所蔵を知らせる良い場となりました。

#### 4.1 地形図の整理・公開

地質調査をするには地形図は欠かせないものであり、古い時代の地形を知る重要なデータです。そのため私たちは古い地形図の重要性に着目し、できる限り保管をしていました。しかし収納場所も整理する人力もないまま、いつか役に立つことを確信して書庫の奥のあちこちにただ積み置くままでした。移転により地図棚が設置され収納場所が確保できたのを機に、移転推進室の理解をいただき、乱雑に積み上げられていた2.5万分の1、5万分の1、20万分の1地形図を、整理作業員を臨時に雇い、一目瞭然の状態に収納することができ、利用が増えました。

#### 4.2 旧満州地下資源調査生資料の整理・公開

戦前、満州に派遣されていたGSJ職員および満鉄職員による現地調査の報告書が、手書き又は和文タイプによる印字でしあげられた生の原稿のまま、未整理で多数保管されていました。埃にまみれて積まれていたものを岡野武雄技官の協力により分野別に分類し、所蔵目録「東アジアおよび東南アジア：1945年以前のもの」を作成、公開にこぎつけました(岡野, 1995)。

#### 4.3 渡辺武男文庫の設置

渡辺武男東京大学名誉教授は膨大な図書資料を所蔵されており、生前から大量の図書を当所に寄贈して頂いていたこともあって、没後ご遺族から全図書類の寄贈を受けました。これらを当所と同じ分類により整理し、文庫としてコーナーを設け公開しました。これも移転により広い書庫が確保されたことによって成し得たことでした。

#### 4.4 図書館情報学実習生の受け入れ

溝の口時代に東京の世田谷区にあった国立図書館短期大

学の実習生を1名受け入れていました。図書館短期大学も筑波へ移転し、図書館情報大学に格上げとなりました。引き続き実習生の受け入れを毎年行い、2004年に図書館情報大学が筑波大学に統合されるまで続けました。多い年には11名もの受け入れを行い、資料業務の推進に一役買ってくれました。

### 5. 筑波移転後の資料情報業務

#### 5.1 GeoRef (AGI) オンライン利用の導入

移転後、工業技術院では、1980年に工業技術院筑波研究センター内に情報計算センター(RIPS)を設置し、同センターと各試験研究所とを光ファイバーで結び、研究開発推進のために必要な研究情報の各種サービスが始まりました。

各種サービスの一部として文献に関する供用データベースの提供がはじまり、各自が容易に利用できるようになりました。ちなみに、RIPS供用データベースは当初は①CAS(米国化学会(ACS)のChemical Abstracts Service)②INSPEC(イギリス電気学会(IEE)のInformation Services in Physics, Electrotechnology, Computers and Control)③NTIS(全米技術情報局のNational Technical Information Service)で、少し遅れてGeoRefが追加されました。

#### 5.2 地学文献速報の発行と廃刊

入手した図書類を周知するために、1951年「図書受入目録」を月刊で発行、更に、主要雑誌のコンテンツを掲載し、1964年にコンテンツサービス誌に移行、1975年vol.25から「地学文献速報」(毎号46p.)と改題。国内・国外雑誌の掲載論文の周知を目的としましたが、GeoRefの普及によりその使命を終えて1987年廃刊しました。

#### 5.3 GEOLIS (日本地質文献データベース Geological Literature Search System) の構築

GEOLISの源流は、1942年に元東京教育大学教授藤本治義氏一人によって作られた「日本地質文献目録」に端を発します(藤本, 1942)。その後当所がその作業を受け継ぎ、1956年に「日本地質文献目録1873～1955」として出版されました(藤本, 1956)。文献数が増加するにつれて年1回の発行となり、冊子印刷はしばしば中断しましたが、この作業は脈々として続けられました。100年以上もの間蓄積記録した大量のデータを、移転数年前から機械処理の検討を始めていました。移転によりRIPS利用が可能になったので機械化は一気に進み、インターネット



第6図 GEOLISの変遷

ト公開など数々の改良を重ねて現在に至っています(第6図)。

#### 5.4 日本地質図索引図 DB化

冊子「日本地質図索引図」は、1900年以降に発表された地質図類文献を目録化収録しています。収録された文献は全て資料室が所蔵しているものです。索引図の収録作業は文献1件1件を20万分の1地形図に図示し、これを書きためていく、という手作業によるものです。この作業の機械化を検討しはじめたのも移転後間もなくでした。

#### 5.5 所蔵外国地質図目録 DB化

地質調査所の蔵書は2回の火災(関東大震災と第二次世界大戦の空襲)によってほとんど消失しましたが、戦後間もなく我々の先輩達は世界の関連機関との文献交換を開始して、世界の文献収集を精力的に進めた結果、多くの地質図類を保有することとなりました。これらはカード目録を作成・整理して利用に供していました。

移転後間もなく機械化の検討に入り試行を重ねて、入力を系統的に開始したのは大分遅れて1995年でした。

#### 5.6 情報の統一化

日本地質索引図は2004年に、所蔵外国地質図目録DBは2006年にGEOLISに統合されました。統合されたGEOLIS(<https://gbank.gsj.jp/geolis/> 2018年8月3日確認)は、現在様々な形で提供されています。

### 6. おわりに

今振り返ってみますと、当時は皆若かったので、通常業務と並行しての移転作業(肉体労働)もできたのかなと考

えています。移転前、資料業務に携わった先輩達の見聞の明があったお陰で、筑波では蓄積された資料類を元に、情報化の機運と相まって上記の通り成果を上げることができました。その経験が2001年の産業技術総合研究所の再編作業や、2011年の東日本大震災後の産総研図書業務室(当時)集中化のための作業に活かされました。

### 文献

- 藤本治義(1942) 日本地質文献目録. 地人書館, 337p.  
 藤本治義(1956) 日本地質文献目録 1873～1955. 地人書館, 711p.  
 本荘時江(1982) 工業技術院地質調査所資料室(<シリーズ>資料室紹介(36)). ドクメンテーション研究, 39, 449-452.  
 本荘時江(1988) 地質調査所資料室の文献情報サービス. びぶろず, 39, 269-275.  
 岡野武雄(1995) 地質調査所蔵書目録 東アジアおよび東南アジア: 1945年以前のもの. 通商産業省工業技術院地質調査所, 174p.  
 資料室(1979) 筑波移転と資料室. 地質ニュース, no. 303, 16-28.

SUGAWARA Yoshiaki, HONSHO Tokie and SOYA Makiko (2018) GSJ's historical transfer to Tsukuba 2: Library, Geological Survey of Japan.

(受付: 2018年7月9日)